

国際彫刻シンポジウムに見られる対話型鑑賞教育： ドイツの園児・小学生の活動を中心として

著者	森本 昭宏
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	12
ページ	169-179
発行年	2012-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000378/



国際彫刻シンポジウムに見られる対話型鑑賞教育

— ドイツの園児・小学生の活動を中心として —

Interactive Art Appreciation Education Seen in International Sculpture Symposium

For Kindergartners and Elementary School Students in Germany

森 本 昭 宏

MORIMOTO, Akihiro

鑑賞教育の重要性が昨今叫ばれる中、美術館では学芸員、アートサポーターによる子どもたちや市民を取り込む様々な教育普及活動がなされてきた。

完成された美術作品の鑑賞の枠をはずれ、公開制作中の作家を訪問する鑑賞教育の企画が海外の国際彫刻シンポジウムに多く見られる。自身が招待参加したドイツでの3回の国際彫刻シンポジウムを中心に、作家との対話型鑑賞教育の有用性について考察した。

はじめに

鑑賞教育の重要性が昨今叫ばれる中、美術館では学芸員・アートサポーターによる企画展鑑賞ツアー、企画展作家のワークショップなど、様々な形で子どもたちや市民を取り込む教育普及活動がなされてきた。「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」が2006年に東京国立近代美術館で開かれた。独立行政法人国立美術館が全国の小中学校教員と指導主事・美術館学芸員を対称に初めて開かれた研修会であった。美術館と学校と、それぞれ独自に進めてきた鑑賞教育の研究が更に横の連携を進めるものとなった。¹⁾

小学校学習指導要領 図画工作に目を向け

ると、“内容”に「感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、表し方の変化、表現の意図や特徴などをとらえること」と作品の鑑賞について高学年に記されている。作品を対象に、見て・思い・感じたことを自分の言葉で発することの大切さが現代のコミュニケーション能力に必要とも言える。²⁾また、同学習指導要領の“内容の取り扱い”に、児童や学校の実態に応じて地域的美術館との連携が謳われ、国内外の美術作品などを鑑賞する鑑賞教育の充実が求められている。

そこで、過去3年間ドイツでの美術館訪問及び現地での国際彫刻シンポジウムという制作体験を通して見られた、子どもたちとの

キーワード：鑑賞教育、国際彫刻シンポジウム、ワークシート、彫刻、ドイツ

Key words : art appreciation education, International Sculpture Symposium, worksheet, sculpture, Germany

アート鑑賞教育の実践に着目した。子どもと芸術作品、学校と美術館というそれぞれの観点から生じる鑑賞教育に、シンポジウムでは作家が公開制作しながら輪に加わり作品と共に子どもたちの鑑賞の対象となっていた。体験型の鑑賞教育、対話型の鑑賞教育に子どもたちはとてもおのびおのびとしている。作家が関わることで変化が生まれた子どもたちの活動と様々な対話型の鑑賞教育について、自身の彫刻体験と実践を交えて検証することとした。

1. 研究実践の方法

海外の芸術活動に目を向けると、公開制作というスタイルの国際彫刻シンポジウムが日本より多く見受けられる。日本では石の彫刻シンポジウムが主流であるが、他国はそればかりではない。過去10年間、デンマーク、スペイン、アルゼンチン、イタリアなどの国際大会に招かれる機会を得た（過去10大会の参加）。そこで、幼児から生徒までの鑑賞教育を彫刻家という立場で体験してきたことから継続調査を開始した。シンポジウム会場には会期中、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の訪問があり、鑑賞教育が学校と大会主催者で連携していることが確認された（全ての大会ではない）。私は子どもたちからは彫刻家という取材を受ける立場であるが、引率教員に現地で交渉して逆取材の許可を得た。

近年、美術館に学校単位で鑑賞に出かけることは少なくない。地域性もあるがそれは西欧においても同じことが言えるであろう。

子どもが美術館に行き、作品に対して話し合う鑑賞教育の活動は世界中の美術館、学校で見受けられる。その活動のひとつとして、ニューヨーク近代美術館教育部門のアメリカ・アレナス氏のメソッドは対話型のギャラ

リー・トークで世界中に広く紹介されている。³⁾今回はアートツアーに取り組むドイツの美術館にも焦点を当て、子どもを取り巻く美術教育普及活動の現状とシンポジウムとを関連させて、研究を進めることとした。

2. ドイツの美術館と学校の取り組み

ドイツの美術館における教育普及活動について、ヴェルツブルク美術館amDom（アムドム）を2009年に調査訪問した。大聖堂の近くに建てられた近代的建築物で、玄関前には野外彫刻が数点設置されていた。具象彫刻作品に見間違えるかのように、自然と作品の横でくつろぐ若者の姿が見られ、大聖堂と共にここは市民のコミュニティーの場であることが伺われた。この美術館の児童・青少年フォーラムは子どもや若者のニーズ・興味のための美術館教育普及活動を積極的に提供している。入館案内や美術館ホームページを確認すると、幼児・児童向けの取り組みのある内容が多く見受けられた。⁴⁾異なる年齢層に合わせて調整されたツアーは芸術特別展のためだけでなく、定期的に行われているところが強調されていた。又2008年から2009年の活動では毎月1回土曜日に子ども向けツアーが行われ、夏休みは月3回開催されていた。⁵⁾

宗教の対話というテーマでの非キリスト教の子どもと青少年のためのツアーは、宗教画の鑑賞に役立っているようである。

この美術館内を観覧すると、バロック時代前後の作品と東ドイツからの作家たちの現代美術との比較展示が理解できた。同様のトピックの古いものと新しい芸術、例えばティルマンリーメンシュナイダーの具象彫刻とアントニウス・ハッケルマンの作品（1,500年代と1900年代の木彫家）との比較などである。

HPを見ても、意図的に対比展示が行われていることが確認できた。

宗教及び他の総合科目やスペシャルツアーなどは、学校の要望に応じて利用できるなど、様々な美術館鑑賞ツアーが用意されていることが分かる。例えば、3人の美術教育者が8歳以下の子どもにツアーを組んで、大聖堂・博物館・美術館と連携してキリスト教美術における植物のユリについての鑑賞ツアー（絵画と彫刻）を行う記録も見られた。また、色を使った実験的なサマーアクションプロジェクトなども開催されていた。

このような定期的に行われる土曜日の活動はヴェストファーレン州 Folkwang 美術館（Museum Folkwang）においても同様な催しが見られ、各地で教育普及活動が盛んに行われていることが伺われた。⁶⁾そこでは『美しい土曜日－子供のためのワークショップ』と題した6歳から12歳を対象としたワークショップが開催。時間は土曜日14：30分から16：30分の2時間の行程で、Folkwang 美術館を作る（子どもの作品で館内を装飾）ことを目的に、プログラムは特に子供や家族、教師と生徒、若者や学生にも向けられていた。芸術、文化、生活に活発な議論や交流を勧めている美術館であった。⁷⁾

このように美術館と学校の連携はドイツ各地に点々と見受けられ、作品を対象とした対話型のガイドツアーや子ども向けトークが定期的に行われているという鑑賞教育の土壌があることが伺われる。

3. 国際彫刻シンポジウムについて

2009年から2011年に掛けて、ドイツで3つの国際彫刻シンポジウムに招待参加した。作家という立場で木を彫る大会に参加しながら、

学校教育との連携と鑑賞教育について調査した。

彫刻シンポジウムとは、材料長さ約2メートルの丸太と道具（チェーンソー）、昼食の提供を受けながら6日から10日間（大会によって会期は大幅に違う）といった、会期中に公開制作で作品を完成させる国際大会である。事前に提出審査された各々のテーマ作品をノミとチェーンソーで彫っていく。その大会は市や州政府が主催し、広く広報活動されているため（国や場所によっては、そればかりではない）会期中に多くの市民の来場者で会場は賑わう。

I. 第3回バード・ザルツンゲンシンポジウム 公開制作（場所：ドイツ Bad Salzungen市湖畔）

チューリンゲン州エアフルトから西60 km に位置するバード・ザルツンゲン市が主催のシンポジウムは、ブルク湖（直径400m）湖畔一周に木彫作品を置く、彫刻プロムナードの完成を目指している大会である。同様なプロムナードとして、北海道洞爺湖に1993年から2007年まで2年に1度開催された彫刻ブロンズ作品を野外設置する観光事業があった。⁸⁾その木彫方式と言えるかもしれない。バードとは温泉を意味し、この湖はスパ施設やホテルが並ぶ観光保養地である。

制作日数は6日間。会期は2011年8月下旬。作家はドイツ3名、デンマーク、ブルガリア、ルーマニア、日本の5カ国7作家であった。

（1）学校の訪問（鑑賞を受けた日にちと人数）

初 日 幼稚園児 4歳10名、教員 1名訪問
AM10：00（約10分）

2日目 幼稚園児2歳～5歳16名、教員4名訪問。散歩コースの往復に各10分鑑賞AM9:30と10:30

3日目 幼稚園児5歳10名、教員2名訪問AM9:40（10分間）

小学校2年生7、8歳クラス約18名、教員4名訪問AM9:40～10:40（1時間）

高校1年16歳教員1名引率AM10:30～10:55（25分間）

4日目 小学校3年生8、9歳Aクラス16名、教員2名訪問&小学校3年生8、9歳Bクラス20名、教員2名訪問AM9:30～10:30:2クラス合同（1時間）

5日目 小学校4年生9、10歳クラス18名、教員AM9:35～10:30（約1時間）
中学校1年生10、11歳クラス20名、教員AM9:35～10:30（約1時間）
幼稚園児5歳6名、教員1名AM9:25（約10分）

6日目 夕方17時から閉会式。来場者市民約100名

便宜上、小学校・中学校・高等学校と分けたが、ドイツの教育は3～6歳は就学前教育期間、6～10歳までは基礎学校、10～15歳まで上級学校があり、ハウプトシューレ（専門学校）、実技学校などと複線型である。

6歳から15歳までは義務教育であることは、日本と同様と言える。訪問のあった基礎学校は2、3、4年生。その上の上級生はギムナジウム（中高一貫）と思われる。

（2）子どもたちの活動

幼稚園児と作家の関わりは時間的にも短く、日々のお散歩コースに寄っていく姿が見られ

た。木片に興味を持ち、2、3枚15cmの固まりを作家から貰って、園児は木と木を叩いたりこすり合わせたりしていた。通路がコンクリートでなかったら、線を描いて遊んでいたと思われる。図1）

小学校の校外活動は計画的に準備され、目的意識を持って訪問された。リュックサックを背負い学校から片道約1kmを歩いてきた。大会会場は湖畔道沿いの芝生の公園内で行われていて、中央門の中に作家のプロフィール、作品のエスキース（企画図）、タイトルなどが書かれているボードが立ててある。子どもたちはそれらの説明を教員から受け、その後各作家のもとに散らばっていく。入念にボードを見入っている子どももいれば、すぐに興味のある作家のもとに駆け寄る姿が見られた。各作家はエンジンチェーンソーを振るっているため、鳴り止むまで手を耳に当ててじっと見つめている。鳴り止むとワークシートを片手に取材（次の項目で紹介）。切り取られた木片を拾って遊んでいた。図2、3、4）

1時間という決められた鑑賞時間と7人の作家が各々の場所で TENT を張って制作をしているため、教師が説明するには時間が短い。あとは散らばった子どもを巡視しながら子ど



図1 木片チップを作家からもらう園児たち



図2 切り取られた端材で遊ぶ児童



図3 組み木パズルのような形をつくる児童



図4 児童の作品 木片を立て葉っぱが添えられている。同様の作品が横に6点

もに声掛けを行っていた。子ども自らが自発的に作家と関わるよう一歩控えて回っている印象を受けた。数回の訪問の中で、子どもが私との会話で苦しんでいるときに言葉の仲介で教師が現れることがあっても、教師から子どもより先に声を掛けられることは少なかった。

これはニューヨーク近代美術館教育部門のアメリア・アレナス氏のメソッドで、川村記念美術館や水戸芸術館現代美術センターでも行われたギャラリートークのプロセスを思い起こさせた。アレナスは美術館展覧会の子どもたちへの作品紹介を説明型のギャラリー・トークではなく、授業の一環として子どもたちとトークする対話型を推奨した。子どもたちが自発的に作品に関われるように「作品をみて、自分や社会について思いをめぐらす、作品そのものではなく、そこから考えるきっかけが生まれること」を目指したのである。⁹⁾ 教師が黒子になって、子どもたちの欲求や行動に裏方から支援する。作家と子どもの会話を促進させる側に回っていることが感じ取られた。

(3) 用いられたワークシート

作品鑑賞する前に、教師は児童に観察ポイントの書かれた用紙(ワークシート)を配布。ワークシートは、「授業を行う教師が活用の意義や利点を踏まえ、題材のねらいに沿って作られることが重要である」¹⁰⁾と言われる。3、4年生に共通使用でき、質問項目も作品や作家に関心を持たせる目的になっていることがわかる。次頁表参照) 子どもが作者に質問を投げかけ、聞き取ったことを記入する。図5) 空白部分も多く見受けられたが、友だちと話し合ったり、作家プロフィールのボードから

探して記入していた。〔訳したワークシート〕

彫刻家を訪問

1. あなたの（作家の）名前は何ですか？
2. あなたは（作家は）どの国の出身ですか？
3. 今年のテーマはどうですか？
4. どのような形を作りますか？
5. どのような素材なのでしょう？
6. どのような道具を使いますか？
7. あなたの彫刻の名前（タイトル）は何というのでしょうか？
8. 展覧会（展示・完成）はいつですか？

〔市内小学校3、4年生のワークシート〕

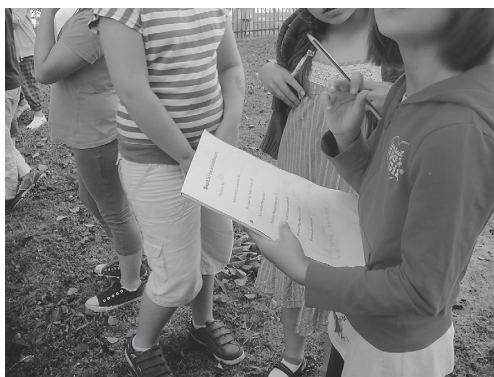


図5 ワークシートを持って質問に回る児童

私に質問取材してきた3年生の女の子に、どのように記入できているか見せてもらった。以下その回答。

1. Akihiro Morimoto
2. 東京近郊
3. 4つの要素（エレメント）
4. 空気・すき間
5. オーク（樫の木）
6. チェーンソー
7. 未記入（ここでは伝わらなかったが、看板標識から作品タイトルの確認作業をしていた）
8. 最終日の金曜日

私はスケッチブックを見せながら身振り手振りの英語説明であった。ドイツ語ではない



図6 木の塊や枝葉をかばんに入れて、持ち帰る様子



図7 児童が拾った様々な木片、表皮、削りかす等

が、3年生は理解してワークシートに書き留めていたことが解る。他の子どもたちのシートも同様、他国の作家の内容を記入できていた。子どもたちの印象は物怖じをしないで積極性がある。グループで行動するが、堂々と一人で作家に質問ができる。日本の子どもたちでは私は想像ができない程の親近感と積極性を感じた。図5、6）

制作をしながら子どもの動きを観察していると、子どもはワークシートの記入に終始するのではなく、ノミを叩く姿などをじっと観察していた。そこからこぼれる木屑の塊、

チェーンソーで切り取られた大きな木片に興味を示し、触って感触を確かめ喜んでいる子どもの光景が印象に残った。図7) 先ほどの項とも関連するが、ワークシートはあくまでも作家と子どもを繋げる鍵でしかない。作家に声を掛け質問を投げかけることで心の会話を開かせ、作品と作家と子どもの関係性が循環し呼応し始める。

ワークシートに記入するという行為は、作家との心の交流の始まりであり、見て・感じることで、素材や作家・他国の文化に触れ合うことに繋がると思われた。

Ⅱ. ヒュプシュテット国際彫刻シンポジウム 公開制作

ローマ法王ベネディクト16世が母国ドイツを公式訪問したのが2011年9月であった。視察訪問が予定されていたチューリッゲン州の教会に環境整備（野外設置）する目的で、シンポジウムが開催された。制作日数は13日間。会期は2011年8月中旬。作家はドイツ2名、ポーランド2名、日本の3カ国5作家であった。

(1) 学校の訪問(鑑賞を受けた日にちと人数)

3日目 小学校1年生6歳12名、2年生7歳3名、3年生8歳1名、4年生9歳6名の合計22名、教員3名訪問
AM10:50~11:45 (1時間)

両親が共働きの家族の子どもたち4つの学年が合同となり、夏休みスペシャルプログラムとして、シンポジウム会場の訪問が企画された。「2週間後に正規の授業がスタートされる」と教師から説明を受けた。大会会場から南東800mの所に地元小学校があるが大会会場前の通りが散歩コースにもなっているそ

うである。図8)

(2) 子どもたちの活動

4学年合同で、正規の授業ではないこともあるため、ワークシートを持つての鑑賞ということではなかった。記念写真を撮った後、子どもたちは各作家の制作会場を見学して回る。

作家たちは手を休めて子どもに自由に作品を見てもらうよう促しながら、教師に作品の説明をしていた。子どもは各作品に分散し、大木の木肌を触ったり木屑を拾ったりと一通り回っていた。しばらくすると私のところに5、6人ぐらゐが集まってきた。いろいろ子どもに説明を始めるが言葉が通じないため、教師が子どもに助言。教師と作家が話し始めると、その内容を聞こうとたくさんの子どもたちが集まり耳を傾けてきた。

日本の鑿は西欧と構造的にも違う。鑿を子どもたちに見せて、硬い鋼と軟らかい鉄の合わせで刃物が出来ていることや、他の道具を紹介すると、作家のみならず教師も興味を示す。ハンマーを子どもたちに持たせ振らせると、その重さに驚き、うんうんと頷きながら道具を私に戻す。こんなに重いものを振りながら木を削っているのかと言わんばかりの笑顔が返ってくる。言葉が通じなくても、身振り手振りで心が通じる瞬間があり、作家にも制作の意欲として返ってくることを実感するひと時であった。

Ⅲ. バード・ランゲンザルツァ国際彫刻シン ポジウム公開制作

制作日数は11日間。会期は2009年8月中旬。作家はドイツ3名、フランス1名、ポーランド1名、日本の4カ国6作家であった。¹¹⁾

（1）学校の訪問（鑑賞を受けた日にちと人数）

5 日目 幼稚園児 4 歳16名、教員 2 名訪問

AM10：35～11:15（40分間）

中学校 2 年生（実科学校）13、14、

歳 8 b クラス約18名、教員 2 名訪問

AM14：05～15：10（1 時間）

7 日目 幼稚園児 2、3 歳16名、教員 2 名

訪問AM10：15頃～10:45（30分間）

8 日目 高校 1 年16、17歳 6 名教員 2 名

AM11：30～11：50頃（20分間）

（2）子どもたちの活動

幼稚園園舎はシンポジウム会場である植物園西側に隣接していた。作家が昼食を取りに離れている時間帯にも他クラスの来園が予想された。地元幼稚園は2、3 歳クラス16名、4 歳16名、5 歳18名、6 歳20名と各クラス 2 名の教員が配置されていることを来園した園長から伺った。図9）

5 日目に来園の中等学校生徒 8 b は、グレード5 から10までの中学・高等学校4 学年目であった。グレード9 の15歳まではドイツでは義務教育であり、日本と共通である。グレード7、8 は実技科目を多く取り入れ、医療・介護、美容、料理などの体験学習が多く、たくさんの活動記録がホームページで確認できる。卒業後は上級の職業専門学校に進学が就職すると思われる。

午後の正規授業は13：55から15：25（各45 分授業）である。300mを歩いて来園していることから、7、8 時限の時間を全て使った鑑賞授業であった。図10）

（3）ワークシート

持ち物はバインダー（ワークシート：次頁表）とペンのみと軽装であった。目的意識を



図8 ヒュプシュテット国際彫刻シンポジウムの見学に来た子どもたち



図9 木屑を集めて遊ぶ2、3歳児たち



図10 中学生の訪問 最初は固まって眺めていたが、この後各作家に分散して取材が始まった。

バード・ランゲンザルツア彫刻
シンポジウム観察2009年8月

観察作業（ワークシート）

1. シンポジウムに参加しているどの芸術家を気に入りましたか？
2. 彼らのどの国から来たのですか？
3. 彫刻に使用する道具にはどのようなものがありますか？

作家の名前	彫刻の素材	道具

4. どの主題をもって、アーティストはそのデザインをつくりましたか？その彫刻についてどのようなアイデア、考えが投入されていますか？
5. どの彫刻があなたに最も感銘を与えましたか？それはどのようなところですか？その美しさを書き留めて下さい！
6. 彫刻は最終的にバード・ランゲンザルツァ市に帰属されます。あなたの好きな彫刻が、新しい場所で最終設置されるところを記録しましょう。

場所

市内中学校（13,14歳8 bクラス）〔筆者記〕



図11 作家プロフィールからワークシートの記入をする中学生

持って作品を見て周り、園児のように何かを持ち帰るという姿は見られなかった。図11)

質問項目4、5番では彫刻のテーマを見つめ、その良さを自分なりに感じ、言葉で書きとめさせようとする、教師の作品を鑑賞させようとするねらい・観点が年齢に合わせて項目立てされていた。同じ西洋の同時期・同年代の鑑賞教室での教師の目的に、以下のような活動があった。「鑑賞の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、豊かな心情を養うこと。—中略—日常的に豊かな美術作品に接し鑑賞する態度を養おうというものである。」¹²⁾とウィーン中学部子どもたちの美術鑑賞教室の目的・記録がある。心情を育て、鑑賞する態度を養うという点においても、6番の項目に着目したい。このドイツのワークシートの活用は美術作品に触れる喜びを一過性のものに留めず、財産として共有していくねらいまで含まれていると考えられる。

若い引率教員が様々なところで記録写真を撮っていた。その後の学内授業でワークシートと照らし合わせ、後日学内授業で使われると推測された。

作家人数分の素材や道具を記入する項目表が3番にある。また、植物園会場に石彫と木彫作家が分散して制作していたため、慌しく生徒は動き回っている印象を持った。6人から8人位で固まって周り、2、3人が作家に質問していた。友だち同士の対話も大切であろう。価値観の共有や他者との物の見方の違いがグループの話し合いから解ることも多いにある。鑑賞時の対話や、授業でのディスカッションも今後の取材対象に考えたい。

考察

美術館に飾られた作品を鑑賞して、教師や

学芸員がワークショップでのファシリテーター（促進者）の役割をすることは多い。同じ美術作品でも美術館鑑賞とシンポジウム鑑賞の違いは何処であろうか。それは製作中の作品と目の前に行為を見せる作家がいることである。素材から作品完成に至る過程を見ることが、作家に触れ合うことで、作者のものの考え方や各国の文化の違い（道具の違いなど）、さらに後日完成作品がそこに展示されることで作品と日常的にも長い時間軸に関わることができる。ファシリテーターとして、子どもに何を目的に鑑賞させるのか、違う角度が求められるであろう。

木彫であっても湿度の低い西欧では、野外に長期展示が可能であり、実際に多く見かける。授業訪問で鑑賞した作品が日常にパブリックアート（公共空間の芸術作品）として今後も鑑賞でき、未来の時間軸も作品に付随する。酒井忠康は著書『彫刻家との対話』『パブリックアートとは何か』の中で、パブリックアートのもつ時空間の延伸性力つまり日常性と非日常性との間にとりもつ紐帯の役割をはたす¹³⁾と、作品が今後も果たす役割を示唆する。

子どもたちの心の豊かさ、成長と共に、作品の見方・感じ方も印象が変わることが予想される。人との対話と同時に自身の対話に広がりを見せてくるであろう。

おわりに

今回はチューリンゲン州における3つのシンポジウムと美術館ガイドツアーの調査であった。鑑賞される立場でありながら、逆取材で引率教員とシンポジウム主催者の許可を得て資料収集・撮影に望んだ。作品を完成させる大会の目的を遂行しながら、子どもの姿

を客観的に捉え、教師、子ども、作家の観察を行った。子どもたちや教師への踏み込んだ取材に時間的にも制約があったが、今後同じシンポジウムに参加できることなら、事前に大会主催者に交渉して、さらなる取材を追及していきたい。

子どもたちは、後に家族を連れて会場に姿を見せ声を掛けてきた。そこから幅広い年齢層の市民との交流もあった。作品を見て感動する心が人との対話を生み繋げていったと思われる。作家と子どもたちの交流が鑑賞教育の新しい一面を見せた。鑑賞授業後の学内授業においての活用の仕方など、研究の余地はある。学校と主催者、子どもと作家・文化など、様々な鑑賞教育の方法と効果等について今後も研究を重ねていきたい。人がなぜ作品をつくり、鑑賞するのかといった根源的な関わりに目を向けていくことも大切であろう。

【参考・引用文献】

- 1) 2012年7月16日 日本経済新聞朝刊 P21
- 2) 2006年10月21日 日本経済新聞朝刊 P40
- 3) アメリア・アメナス『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』淡交社、2001年4月。
- 4) am DOM美術館レター（機関誌）より
- 5) 2007年10月から2008年12月までのHinBlick（当美術館情報誌）にて分析。毎月1回土曜日に開催が多い。Museum am Dom www.museum-am-dom.de
- 6) 7) 美術館HP参照
<http://www.museum-folkwang.de/en/-education.html>
- 8) 洞爺湖を囲むように構成される洞爺湖町と壮瞥町が「人と自然がふれあう野外彫刻公園」として、湖畔に全58基を配している。彫刻をめぐって自然と彫刻アートとの調和を楽しむことができる。
- 9) 『まなざしの共有－アメリア・アメナスの鑑賞

教育に学ぶー』第3章トークの成功に導く鍵淡交社、2001年3月。p83

10) 大坪圭輔 + 三澤一実編『美術教育の動向』武蔵野美術大学出版局、2009年3月。p62

11) 大会の詳細は、森本昭宏『ドイツ バード・ランゲンザルツァ国際彫刻シンポジウムと鑑賞教育』埼玉学園大学紀要 人間学部編 第9号、平成21年12月を参照。

12) ウィーン日本人学校教頭 ニノ宮陸生『ウィーンにおける美術館を活用した鑑賞教育』在外教育施設における指導実践記録 東京学芸大学2009年10月。p29

13) 酒井忠康『彫刻家との対話 現代彫刻の世界』未知谷 2010年2月。p74

※各シンポジウムの詳細は著者のホームページを参照。森本昭宏Web HP
<http://www006.upp.so-net.ne.jp/mokujiki/>

－参考文献－

女子美大学編『アートがつなぐ学校と社会』柴峰図書、2005年3月。

佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む』東京大学出版会、2003年3月。